



報告

# 第11回農業気象研究会 気象情報を利用した作物の発育予測



天気予報や気象データを利用して作物の発育や収穫時期を予測する試みは、農業において古くから取り組まれている重要な課題です。近年では、数値予報の高精度化や情報通信技術（ICT）の発達にともない、各種作物の生産地において気象情報の活用が盛んになってきました。そのような背景のもと、農業環境変動研究センターは昨年12月、気象情報を利用した作物の発育予測をテーマとした研究会を開催しました。基調講演では作物の発育予測の仕組みについて詳しい解説がなされ、続く各講演では、小麦、大豆、野菜、果樹など作物ごとの具体的な予測方法や栽培管理への利用例が紹介されました。会場となった気象庁講堂には、定員（120名）を大幅に上回る多数の参加者が訪れ、熱心な議論が交わされるなど、このテーマに高い関心が寄せられていることがうかがえました。（気候変動対応研究領域 丸山 篤志）



報告

# いばらき農業アカデミー 農業環境インベントリー展示館で “土壌”の講座を開催

平成29年度からスタートした“いばらき農業アカデミー”は、農業者や農業を志す方々などを対象に、農業経営や先進技術などに関するさまざまな学びの場を提供しています。茨城県が開催するこの取り組みに、農研機構も協力しており、10月には、農業環境インベントリー展示館を会場に、生産環境管理（土壌）講座のうちの第1～3回が開催されました。この講座では、土壌資源評価ユニットの大倉利明上級研究員が講師を担当し、土壌の成り立ちや機能の本質を理解していただくとともに、普段目にするものがない国内外の代表的な土壌断面を見な

がら、土壌の性質と作物の生育や産地の形成、地球環境との関わりなどを体感してもらいました。講座は、「土壌の価値を意識した農業のあり方を考える」機会を提供し、鯉淵学園の小川吉雄教授による第4回（農地の土壌特性及び作物の生育特性に適した合理的で効果的な施肥、できるだけ環境への負担を減らし持続的な生産をするための土づくりの基本）へと続きました。

受講者は3回の合計で約50名、農業者（農業法人の従業員を含む）が約7割で、県の普及指導員や研究員の方の参加もありました。はじめて土壌の根源的な話を聞き、理解や興味が深まったという感想とともに、自分の農地で深層まで含めた土壌改良や物理性の改善をするには具体的にどうしたらよいか、またこれらを知るには時間が足りなかったなどという声もありました。（企画連携室）



薄片標本の画像を解説（左上）、日本の代表的な10種類の土壌（左下）や筑波台地の土壌を（右）土壌モノリス（断面標本）を使って解説

## Editor's Note

農業環境研究では、さまざまな境界（ボーダー）を超えて解決を図る課題が多く存在します。本号では、この一つとして国際連携の取り組みについて注目しました。（企画連携室）